慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	リストの経済思想の背景
Sub Title	
Author	山田, 正夫
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1927
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.21, No.7 (1927. 7) ,p.906(64)- 943(101)
JaLC DOI	10.14991/001.19270701-0064
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19270701-0064

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

リストの經濟思想の背景

山田正夫

List と亞米利加との關係は二個の見地より考察せらるべきである。彼が亞米利加に與へたるものと、彼が亞米利加より受けたるものと。換言すれば、彼が米國の政治經濟上に及ぼした影響と、その米國在住中の見聞が彼自身の上に及ぼしたる影響とが之である。私は今この第二の點に關して少しく考究して見たいと思ふ。

第一の點に就いては、猶幾多の附言すべきことを缺いてはゐるが、其の一斑を前稿「アメリカに於けるフリィドリヒ、リストに記述した。更に米國の政治經濟思想に對する彼の影響、就中、Henry C. Carey との關係に關しては、別に論證を行ふ豫定である。

『運命の導くがまゝに余の亞米利加に渡るや、余はあらゆる書籍を放擲し去つた。書籍は唯余をして誤らしむるのみ。此の新興國に於いて、吾人が讀むべき政治經濟に關する最良の著作は、實生活である。……かゝる書籍を、余は且つ貪り、且つ精勵して閲讀し、依つて以て創意せる學理を、余が在來の研究、經驗乃至は考察と相調和せしめんと試みた。斯くすることに依つて、余の期待せるが如く一の體系は發生した。而して此の體系こそ、たとひ始めは如何ほど不完全なるものゝ如き外見を呈するとも、而も猶根據なき世界主義の上に立てるものには非ずして、事物の本質、歴史の理論並びに國民の要求に基いてうち建てられたものなのである。』(一) 嘗ては正統學派の學徒でありながら、而もその信奉せんとする教義に大いなる疑を懷いて去就に惱みつゝありし List が、斷然舊説を棄てゝ己が所信に邁進するに至つた動機を、彼は自ら斯くの如く語つて居る。茲に吾人は屢經濟學史家に依つて唱へらるゝ、學説と時代、學者と環境との關係が、List に於いて最も顯著に示されたるを觀るのである。

尤も、List は所謂經濟學者の名を以て呼ばれる人々とは少しくその趣を異にして居つたことを、特に考慮せねばならない。彼の生涯を顧るとき、吾人は、陰鬱なる書齋に閉ぢ籠つて、堆く積まれた書籍の内に吃々として研鑽と思索とに耽ける一學究としての List よりも、活氣ある實社會の先頭に立つて、己が所信を眞向に振り翳し、營々として其の實現に熱誠を傾けつゝある實際家としての List を見ることが多いのである。さればこそ Roscher の言へるが如く、『Friedrich List の學理上に於ける偉大なる意義は、實にその遙かに偉大なる實際上の意義に基いてはじめて、理解せらるべきで』(二) あつて、吾人は躊躇なく、彼の經濟思想を左右せる最も有力なる原因は、正に社會の實狀に外ならざりしことを主張して憚らぬものである。

再び Roscher の言を藉り來れば、亞米利加は List に取つては、『彼に生涯の重要なる業績に對する鍛練を、豫めなさしめたる大學』(三) であつた。年齒正に三十有六にして此の大學に身を投じたる彼は、その經歴と見聞とに依つて、換言すれば彼自身のいふ『實生活なる書籍』を熟讀して、如何な

ることを學んだか。彼の自ら語る所に聽けば、『此の國に於いて、吾人は荒蕪變じて富裕强壯の邦家となるを見る。此の國に於いて始めて、余は國民經濟の段階的發達を明にすることが出來た。歐羅巴に於いては數世紀を通じて行はれる過程が、此の國に於ては悉く吾人の眼前に顯れてゐる――未開の狀態より牧畜の狀態へ、牧畜の狀態より農業の狀態へ、而して更に農業の狀態より製造工業及び商業の狀態への推移が即ち之である。此の國に於いて人は、如何にして地代が皆無の狀態より、漸次に昇騰して莫大の額に達するに至るかを、觀取することが出來る。此の國に於いては、單なる一農夫と雖も、農業の隆盛を計り、地代の騰貴を招くの手段に關しては、舊世界の最も聰明なる學者よりも遙かに實際的に優れた理解を持つてゐる。――即ち彼は製造工業者を己が近傍に集めて之と結ばんと努めるのである、此の國に於いては、農業國民と工業國民との間に於ける相互の對立が、截然として顯れ、最も猛烈なる動搖を惹起しつゝある。此の國を他にして吾人は、運輸交通手段の本質と、國民の精神上及び物質上の生活に對するその作用とを、かくも完全に察知することは出來ないのである。』(四)

然しながら List が斯くの如く實際上の書籍に依つて敎へられた所は不幸にして彼が嘗て學んだ紙上に於ける學者の所論と、些たりとも一致する點が無かつたので、彼の正統學派に對する懷疑は益々深まり、遂に彼はその全然信ずるに足らざる妄誕に止ることを斷定して、之に代ふるに、自己の經驗と研鑽とに依つて、社會の實狀に即した新學說を組織しようと試みたのである。而して夫はまた當然のことであつた。『凡そ新理論の體系を發見するが如きは List に取つては敢て難事ではなかつたのである。活眼以て能く世相を洞察するに慣れ、實生活を利用するに達したること、彼の如き人物にして、異れる政治生活の事情を知ると共に之を是とするに於いては、彼が在來有したる見解を、容易に變化するを得たであらうし、又然せざるを得なかつたであらう。彼の理性は彼に語つたに違ひない、一國にとつて正當なること、必しも之と事情を異にする別の國に對して均しく正當たることなかるべしと。List の相對的見地は正しく茲に發生し、かくて彼は國民經濟上の眞理を認識するが爲の鍵鑰を與へられたのである。』(五)而もあらゆる舊學說を否定し去つた彼は、『唯一つ歷史のみに依賴して其の智識を廣め、歷史の理論を藉り來つて經濟的見解を支持しようとした』(六) 斯くの如くして List は、『理論と實際とを相一致せしめ、從來、その煩瑣的誇張と、矛盾撞著と、虛妄の名辭とに依つて、健全なる了解を妨げられつゝありし政治經濟學をして、あらゆる敎養ある人士の理解に容易ならしめんとするの可能性』を發見したのであつて、『之實に獨逸商業同盟の建設以來余の念頭に往來しつゝありし宿題にして、而もその解決に再應ならず失望を感じて居た所のものである。』(七)と彼は述べて居る。

寔に『永年の間、嘗に忠實なる Smith 並びに Say の學徒たりしのみならず、また此の强固なる學說の極めて熱心なる敎師たりし』(八) List が舊學理の改宗者として創說せる新理論は、The American System なる名稱を冠する十二通の公開狀は勿論、後年の大著 Das nationale System der Politischen Oekonomie. に於ける其の根本思想に至るまで、悉く彼が米國在住中の實見に基いたものであつて、List の經濟思想は實に之當代の米國社會相の反映に外ならぬとも考へられるのである。

（一）List: Das nationale System der Politischen Oekonomie. Sammlung sozialwissenschaftlicher Meister, herausgegeben von H. Waentig. III. p. 11.

（二）Roscher, W. Geschichte der National-Oekonomik in Deutschland. p. 970-1.

（三）Roscher, W: Zur Erinnerung an Fr. List. Nord und Sud. Bd. 3. Berlin 1877. p. 49.

（四）List: op. cit. p. 11.

（五）Köhler, C: Problematisches zu Fr. List. Leipzig. 1908. p. 91.

（六）Eiberg, K. Th: Historische und kritische Einleitung zu Fr. List's Nationalem System der Politischen Oekonomie. Achte Auflage. Stuttgart u. Berlin 1925. p. 129.

（七）List: op. cit. p. 11-2.

（八）List: The American System. Letter III. Reprint in Hirst, M. E: Life of Fr. List. London. 1909. p. 173.

二

然しながら List が亞米利加に於いて讀めるものは、啻に『實生活』てふ書籍のみに止まらずして、大小古今、幾多の書冊に亘れることも亦た注意せねばならぬ。

始め List の〝Harrisburg に於ける一農場主として定住の所を得るや、彼は農事の傍、その閑暇を專ら讀書と思索とに費したのであつて『かくて余は黽勉之努めて、工業化學、機械學、採鑛學、農業學及びあらゆる實業學の一般等に就いて其の要諦を研究した。機會のある場合には必ず之を利用して農事耕作、各工業部門、並びに商業の實際を習得せんと試み、又新しい言語に慣熟しようと努めた。歴史と政治とは〟余は之を基礎として研究した。實に醫學に至るまでも、余は全然之を知らずに過してしまふ樣なことはなかつたのである。』(一)と彼自ら記してゐる。

更に彼が新聞記者となつて Reading に居を轉じてからは、書籍を手にするの便宜が大いに開かるゝに至り、普通一般の書籍を讀む爲には、Library Company of Reading 並びに當時約 千五百冊の圖書を有してゐた Readinger Deutschen Lesegesellschaft を利用することが出來たし、又 Pennsylvania Society に迎へられて之に出入する樣になつて以來、同協會長 M. Carey 所藏の豐富なる蒐集圖書、乃至は Philadelphia Libiary Association の藏書等を、隨意に借覽するを得たのであつた。(二)從つて彼が此の間に讀破した英書は、決して少數に止まらず、彼自身の當時の手記に書かれてゐる書籍の表に依つても、その讀書の廣衍に亙れることを推知することが出來るのであるが、(三)殊に政治經濟上の問題に關するものに至つては、殆とあらゆる種類の刊行物を閲覽せるものゝ如くであつて、例へば Outlines of American Political Economy. の第一書翰の頭初にも、彼は『Philadelphia Society for the Promotion of National Industry の各種の出版物、この問題に關して議會に於いて行はれた種々の演說、Nile's Register 其他を熟讀した』(四)旨を述べてゐるのである。

斯くの如き事情を顧る時は、List の經濟思想は必ずや彼の博覽に培はれ、何人か或る先人の所說に依つて啓發せられたものではなからうか、と借問するのは、經濟學史家として一應は考究して見なければならぬ當然の疑問でもあり、事實かゝる憶測を裏書するに一見有力と思はれる證跡を發見することは、少しく當代米國の政治經濟思想を遡つて見るならば、さして困難ではないのである。

云ふまでもなく、保護貿易の主張は、亞米利加に於いては List を俟つまでもなく、既に久しい

以前から唱へられて來たものであつて、而も List の經歷を顧ると、彼が保護論を始めて高唱するに至つたのは、Pennsylvania Society と交渉を保つて以來のことであるから、先づ List の見解に對して多少なりとも暗示を與へたものとして同協會の中心人物、就中幾多の論著に依つて保護運動の指導者として仰がれてゐた M. Carey の主張を擧げねばなるまい。(五)

けれども當時の保護論の根底は、既に一七九二年に於ける A. Hamilton の Report on the Subject of Manufactures. に述べられた主旨に終始せるものであると云ふことが出來る　元來 Pennsylvania Society そのものが保護運動の機關として設立せられたのは、Hamilton の唱導に係はるものであり、(六)而も彼の有名な報告書は、List が『熟讀した』と稱する Philadelphia Society の公刊物中の一篇として一八二四年に Carey の序文を附して出版せられ、一八二七年には再版が散布せられてゐるのであつて、茲に List は Hamilton に依て敎へらるゝ所甚深なりとの主張が生ずるのである。(七)

亞米利加に於いて公にせられた最初の、一の體系を供へた經濟學の論著として、人は先づ Daniel Raymond の Thoughts on Political Economy に指を屈する。本書は一八二〇年に其の初版を上梓したものであるが、著者は能く米國の實狀を洞察して、滔々たる自由主義の渦中に在りながら徹頭徹尾正統學派に對して反對の態度に出でて居るのであつて、その保護論者の間に重視せられたるは元より、就中 Carey の如きは悉く其の論旨に傾倒して口を極めて之を推賞し、其の公布を計らんが爲に大なる盡力を惜まなかつたくらゐである。然らば List は未だ嘗て Raymond の名を記したことこそなかつたものゝ、Carey を通じて必ず此の著に親んで居たであらうといふことは、殆と疑の存せぬ所であるし、のみならず兩者の所論の端々を一々對照して見る時には、其の論調用語に至るまで彼此甚だ相近似せるものあるを發見するのであつて、かゝる詳密なる考證を經て一部の學者は、正に Raymond こそ List の先蹤であると斷定して居るのである。(八)

然しながら私は、好奇的詮鑿欲に驅使せられて二個の學說を比較し、その間に存する單なる外型上の類似のみを指摘して、恰かも大なる發見をなしたるが如き誇張と偏見とに捕はれ、强ひて此の兩者に因果の關係を附與して、あらゆる經濟學說は皆之れ何人かの舊說の改訂新版ならざるものなきが如き言を致してその博識を誇り、以て能事了れりとなす學史家流の早斷には、俄かに讃する能はざるものである。といつて私は List の經濟思想に對して M. Carey なり、Hamilton なり、Raymond なりの所說が些かも關係を有しないことを主張するものではなく、三者皆悉く彼の思想の構成に有力なる暗示を與へたる事實は、却つて之等の一を擧げて他を除ける論者より以上に承認するものであるが、扨それでは List の經濟學說は全く之等の先蹤の學理を根據とし基石としてゐるかといふ點に至つては、私は斷じて之を否定して彼の獨創を强調すべき要を感ずるのである。元より斯くの如き私見を確立するに先立つて、彼の思想の發展に關し、獨逸關稅同盟時代より始めて、佛蘭西經濟學者の保護論との交渉、乃至は彼の大著の成立に至るまでの委曲を、一應檢討して見なければならないけれども、先づ差當り私は彼が最も決定的なる影響を受けたといはれる米國時代に就いて、米國實社會の彼に對する敎訓の如何なりしやを究めると共に、果して彼の經濟的主張が、米國論客の糟粕を嘗めたるに過ぎざるや否やを、明にして置きたいと思ふ。

（一）Zollvereinsblatt. 1846. p. 119.

（二）Notz. W: Fr. List in America. Weltwirtschaftliches Archiv. Juli 1925. p. 181.

（三）Hirst, M. E: op. cit. p. 37. n.

（四）Hirst: op. cit. p. 143.

（五）此の點に關しては、未だ有力なる主張はない樣であるが、左の二書には簡單ながらかゝる見解が述べられてゐる Sherwood, S: Tendencies in American Economic Thought. Baltimore 1897. p. 15.　Hirst op. cit. p. 113.

（六）三田學會雜誌第二十一卷第一號、拙稿百〇九頁註（六）。

（七）Hildebrand, B: Die Nationalökonomie der Gegenwart und Zukunft, und andere gesammelte Schriften. Band I. Jena, 1922. p. 46-7.　Sherwood; op. cit. p. 15.　Hirst: op. cit. p. 114 ff.　Schmoller, G: Grundriss der Allgemeinen Volkswirtschaftslehre. zweiter Teil. München u. Leipzig. 1923. p. 700.

（八）Neil, Ch. P: Daniel Raymond, an Early Chapter in the History of Economic Theory in the United States. Baltimore 1897. chap. IV.　Lepelletier, F; Un précurseur de List: Daniel Raymond. Revue d'économie Politique, 1900.　Köhler, C: op. cit. p. 105 ff.

三

先づ初めに私は List と M. Carey との關係を考察せねばならぬが、此の點に就いては今は比較的簡單な記述に止めて置くことを許されたい。

M. Carey は Philadelphia に於ける一流の實業家であつて、熱心なる保護論者として知られ Pennsylvania Society の會長に推戴せられて、一八二〇年よりその歿年に至るまで、保護運動の指導者として能く盡瘁を怠らなかつたが、彼の政治經濟上の時事實際の問題に關する講演乃至は述作の小冊子として頒布せられたるものは、實に無數に及んで居るのである。(一)之等の冊子の多くは著者の姓名を附せずして、單に協會の名に依つて出版せられてゐたが、更に彼の筆に成るもので、彼の同志 Hezekiah Niles が刊行して居た Weekly Register (二)に掲載せられたものも少くなかつた。

List が此の Niles' Weekly Register を閲讀してゐたことは、既に彼自身の所言に依つて明かであるが、(三)其の他の Carey の著述を手にして居つたことも亦決して否定せられないのであつて、彼が新聞記者として米國社會の實狀に對して鋭利なる解剖を行ひ、若くは Pennsylvania Society の委囑を受けて自らその顧問たるが如き地位に立つに至つたのを觀ても、必ずや彼が Carey の論著を通じてその主旨を知悉して居たであらうと推定することは、唯根據のない謬想とのみ云はれないのである。

果して然らば List と M. Carey との所論を取つて比較するとき、如何なる類似をその間に見出すことが出來るかといふに Hirst の簡單な所說に從へば、『List が Outlines に於いて、又は後の諸著作の中に於いて、盛んに運用してゐる議論のあるものは、Carey の潑溂たる論爭を反覆したるものであり、若くは之を換骨奪胎せるものである。露西亞が依つて以つて自國の產業を保護せる賢明なる政策、未だ猶ほ自由貿易政策に膠着せる國民、即ち西班牙及び葡萄牙の衰退、Adam Smith の謬想、最も低廉なる市場に於いて購買する政策を遵奉する國々の陷る衰亡』等に關する見解は、皆悉く M. Carey の論說の中に言及せられてゐるものであるといふ。(四)

然しながら單にこれだけの理由を擧げて List の獨自の立場を否定せんとするの甚しき無謀なるは、言ふまでもないことであつて、凡そ保護政策に左袒せんとする以上、Adam Smith の所說を肯

定し、自由主義を以て最善の政策なりと賞揚することの出來ないのは分りきつたことである。惟ふに List の特色は Adam Smith の個人主義的並びに世界主義的經濟理論に對して、國民經濟の重要を說き、總ての經濟學理の根據と共に保護主義の基礎をも茲に求めんとしたるに存し、其の述作 Outlines は正に彼の斯かる意圖に對する一の試みであり、又 Pennsylvania Society が彼に大小二樣の論著を要求したのは、實に『正しき政治經濟學理論』を彼より藉り來つて保護論の根底を確立せんとするが爲に外ならなかつたのであつた。當時に於ける米國の保護貿易論は實際上の要求に基いて顯著となつて來たものであつて、その論據は專ら Hamilton の見解を踏襲して居た樣な狀態であつたから、後に說く如く List の根本思想とは猶ほ多くの逕庭を存して居つた。從つて行論の末節を捕へ來つて、當時の保護論の主旨と、List の主張の根底とを比較することは、無用であると同時に不可能である。故にまた List が M. Carey と同じく、或は露西亞の例を擧げ、或は西班牙、葡萄牙の實際に就いて證明を行つて居やうが、兩者の論據にして既に相異る限り、その間に何等特殊の關係を付けることは出來ない。況んや List が、『實際上の事例は米國一流の政治家の聰明と慧眼とに依つて悉く指摘し盡されたるが故に、更に之を提供せんとするが如きは、余の如きものに取つては甚だ僭越の業たるを免れぬ』(五)旨を述べてゐるに於いては、彼が之等の例證を他より借用してゐるからといつて、殊更之を問題とする必要はないのである。

之を要するに、List の根本思想は M. Carey 一個の主張に淵源を有するものではない。といつて彼の所論が List に對して何等の暗示をも齎らさなかつたと考へることは、勿論當を得たものとは言へぬ。私は List と M. Carey との思想上の交渉はとりも直さず List と Pennsylvania Society との間の交渉を意味し、從つて又彼と輿論との交渉を物語るものであると觀察する。此の點に就いては本論の最後に述べるが、今一言を費すならば、彼は當時の輿論を Pennsylvania Society の代表者 M. Carey を通じて詳に學んだのである。寔に List に大いなる影響を及ぼしたるものは當代の米國社會思想の潮流であつたが、而もこの社會思想そのものが直ちに彼の經濟思想ではなかつたのであつた。

(一) Mathew Carey は一七六〇年愛蘭に生れ、Philadelphia に移住して一八四〇年に同市に於いて歿した。その死に至るまで彼は有力なる同市民として活躍したが、その職は出版業であり、嘗ては新聞雜誌の編輯に從事したこともあつた。彼が同市に建てた一大印刷場は、今猶ほ Lea Brothers and Co. と呼ばれて殘つてゐる。彼が List と相知るに至つたのは、Pennsylvania Society の會長となつてからで、恐らく Lafayette を通じてであらうと云はれてゐる。彼の著作は今一々擧げてゐられないから、その重なるものは左の二書に依つて參照せられたい。

Pargrave's Dictionary of Pol. Econ. Vol. I. p. 27. Art. Carey, M. Seligman, E. R. A: Essays in Economics. 1925. p. 136-7.

(二) Niles' Register は H. Niles (一七七七—一八三九)に依つて Baltimore に創刊せられ、一八三六年まで彼自身之を編輯してゐた。

(三) 上記六九頁參照

(四) Hirst, M. E: op. cit. p. 114.

(五) The American System Letter I. Hirst: op. cit. p. 148.

四

List と Hamilton との關係を考察するに先立つて、Hamilton の報告書として有名な Report on the Subject of Manufactures. 1791. の要旨を茲に紹介する。(一)

Hamilton は先づ冒頭して曰ふ、『合衆國に於ける製造工業奬勵の利益は、久しく世人の閑却する所となつてゐたが、今日に於いては、殆と一般に廣く認めらるゝに至つた樣である。吾が國の外國貿易を阻害せる障壁は、內國商業の範圍を擴大すべき必要を眞摯に考慮せしむるに至り、益々遞增する我が農產物の餘剩に對して販路を提供せる外國市場が、保護制限の方針に出でたるの事實は、吾が國內に於いて此の餘剩に對する更に大なる需要を喚起せざる可からずとの熱心なる要求を惹起するに至らしめ、或る種の重要工業が納め得たる完全なる成功は、他の工業に於ける幼稚なる試驗に現はれたる前途有望なる形勢と共に、之等工業の發達に對する障害は豫想する程大なるものではないといふ見込を確認せしめ、更にその隆盛に趨くに於いては、既に蒙れる不利益乃至は將來受くべき損失に對する十分の補償と、國民の獨立安全に對して有益なる資本の獲得とを、容易ならしむるに至るものであるとの考を發生せしめた。』(二) 而も猶ほ激烈なる反對論者は、(一)最も生產的なる產業は農業なりと言ひ。富の源泉としては唯土地あるのみなりと稱し、就中合衆國の如き、富裕を致し國力を增進すべき最善の途は開墾をおいて他に無かるべく、(二)從つて權力と人工とを以つて工業を奬勵するが如きは、自然の命ずる產業發達の經路を殊更ら回避して自利の原則に逆ふものであつて、(三)而も合衆國の如く工業勞働の乏しきに加ふるに資本のまた甚だ豐富ならざる國に於いては、(四)工業の奬勵は結局獨占の弊を釀し、一階級のために國家の利益を犧牲とするに了るものである、と主張して讓らない。然しながら『凡そあらゆる理論はまた必ず幾多の例外を伴ふの常であつて、とりわけ政治上の主義主張にして、その示す所眞理の半面些かの誤謬をも交へざるものは絕へて存せざるところである。』即ち Hamilton は上記の如き反對論に答へつゝ己が所信を披瀝するのであつて、以下の所論は凡そ三段に區別せられる。

農業のみひとり純生產物を齎すの故を以て工業の生產的なることを否定する論者に對しては、次の如き回答が與へられる。(三) (一)『工業上の勞働と雖、その遂行上に消費消耗せると同額の價値を再生產し、而も之に使用せる資本を保有して失ふことなきを見れば、之を全然不生產的なりと考ふべきものではない。又論者の難するが如く、工匠乃至は製造業者が原料品に對して附加せる價値がよし彼等の消費せる土地生產物の價値と等しとするも、猶ほそが社會の收益に何物をも附加することなく、若くは土地と勞働との年收益の總額を些も增加するものでないとは信ぜられない。』(二)のみならず社會の富の增進は、獨り農業階級のみの貢獻に俟つものには非ずして、總ての階級の勤儉節約の結果である。(三)更に『土地と勞働との年々の生產物は二樣の方面から增加せられる。當該國內に現存する有用勞働の生產力の增進と、斯かる勞働量の增加とが之である』が、前者に就いて見れば、工人の勞働は農夫の勞働に比較して、作業の分割と單純化とに依つて生產力の改良增進を致すこと遙かに優り、又後者は專ら資本の增加に依賴し、資本の增加は更に社會全般の收入の蓄積に依賴するが故に、之とても單に農業のみに依つて左右せられるものではないのである。

斯くの如く生產的なるは啻に農業のみに止まらずとするも、論者は猶ほその生產力を以て工業の

到底及ぶ可からざるものであると主張する。その理由を聽くに、工業は人力のみに依つて遂行せらるゝに反し、農業は實に人力と自然との協同に依つて遂行せらるゝと云ふにあるのであるが、工業とていかで自然の援助を受けずして存立することが出來よう。のみならず工業勞働は永續的、規則的であつて、四季を通じて變化を蒙らず、晝間夜間共に等しく之に從事することが出來るし、その性質上常に作業に專念ならざる可からざるが故に、農業に屢見るが如き怠慢と弛緩とを生ずる機會も少い譯であつて、此れ等の事情を察しても農工の間に優劣を附けることは不可能である。又別に農業は地主の收益を齎らすといふ所からその工業に優る所以を說く者もあるけれども　こは工業上に於いては、農業の際に資本收益と地代とに劃然區別せられてゐるものが、企業者の出資に對する利潤といふ一般的名稱の下に打つて一丸とせられてゐるのに迷はされた謬想に外ならない、とて Hamilton は、土地を以て資本と見做し、地主が之を小作せしむるは資本を提供すると何等異る所なき旨を述べてかゝる反對論を一蹴してゐるのである。

以上論じ來つた所から、工業が生產上に於いて重要なることの決して農業に劣らざる所以が明かとなつたので Hamilton は第二段に進んで、かゝる工業上の勞働生產力は、放棄放任せられた場合よりも保護奬勵を受くる場合に一層その能力を發揮するものであるといふ理由を縷述するである。(四)

抑〻農業と共に工業が併立してゐるといふことと丈けで、既に農業のみの社會よりも多くの生產物を獲得することが出來るのであるが、斯かる場合には實に土地より生產せらるゝ價値の二倍が消費せられてゐる譯になる。何となれば、工業上に農產物が使用せらるゝと同時に、農業上にも工業の生產物が使用せられるからであつて、例へば今假りに工匠の存在しない場合を考へて見ると、一農夫は農耕に從事する傍ら必要な工業品を得るためにその勞働の一半を工作に傾けねばならぬから、農業上の生產は半減し、彼の收入も消費も悉く工匠が存在する際の半分にしか及ばないのである。そればかりでなく工業上の勞働はまた前述の如く地代に等しい收益をも齎らすのであつて、之が爲に社會の收入が增加することは言ふまでもないことである。

斯くの如き工業の生產上に對する寄與は、工業上の施設を加へその指導の宜しきを得るに從つて、益〻その能力と效果とを發揮するに至るのであるが、此の工業を促進振興する條件となるものとして凡そ次の七箇條を數へることが出來るのである。

第一、分業に依つて、(一)熟練と精巧とを增し、(二)時間を節約し、(三)迅速簡便な方法を案出して機械の使用を增加する。

第二、機械使用の增加はまたとりも直さず人數の增加であり、勞働力の增加であり、而も勞働者維持の費用を必要としない。從つて外國工業品に依賴するは、機械の利益を放棄して之を他國に與ふるに外ならない。

第三、工業施設の完備せる場合には、閑暇を以て副業に從ひ收入を增加することが出來るが、農業上に於て此の利益は殊に大きい。更に從來勞働に從はなかつた人々、殊に婦人及び小兒の勞働を喚起するに至り、かくて從前と同一人數を以て遙かに大なる生產物が獲得せられる。

第四、凡そ人は自分の習練せる職業を捨て、生活の樣式を變化することは、それが餘程の利益でない限り滅多に出來るものではない。合衆國に移住して來る歐洲の商工業者は、製造品乃至勞働の高價、生活必需品乃至原料品の低廉、舊世界に於ける租稅、負擔乃至拘束よりの解放、公平なる政府の下に於ける個人の獨立と人格の承認、信教の完全なる自由、等を享受し得るに滿足してゐるのであつて、かゝる利益を與へらるゝ限りよし農業にして如何程有利なりとするも、敢て之に轉じようとは考へないのである。然らば移民奬勵の爲にも工業施設の確立は緊要である。

第五、凡そ各人は才能性格皆相違せるが故に、各種の產業が悉く存立する場合には、適材に與ふるに適所を以てするを得べく、從つてその効果は最も大なるを得るであらう。

第六、企業の範圍を豐富多樣ならしむれば人間の精神的活動は促進せられ、積極的に有利ならざるが如きものも促されて利益となることさへあるのであつて、實に企業心は社會に於ける職業乃至は生產の單純なると複雜なるとに左右せられて消長を來すのである。

第七、工業はまた土地の餘剩生產物に對して新規の需用を喚起し、從つて內國市場に於けるその販路を確實ならしめるのであつて、これこそ誠に工業が一國の生產及び收入の增加に貢獻するの途であり、農業の盛衰と密接なる關係を有する所以である。

第三段に於いて Hamilton が披瀝せんとする主張は、以上の見解に基いて米國の實狀を考察せるものである。(五)

先づ次の如き主張が行はれてゐるのを見る。曰く、廣大なる沃土を擁し、外國貿易を有利に行ひ得るにも係らず、合衆國が工業を促進して工業品の自給策を採らんとするは、果して當を得たものであらうか。恐らくは土地の開墾と殖民とを以て當面の緊急事となすに如くはあるまい、と。然しながら、(一)若し商工業に對する完全なる自由の制度が諸國民の間に廣く行はれつゝあるものなら、獨り米國のみが苦しんで工業を奬勵する必要はないけれども、現狀を顧れば米國は或る程度まで外國貿易の制限を蒙つて居るし、この上將來歐洲諸國が農產物を自給する樣な事態に立ち至つた曉には、米國は只農產物ばかりを抱へて如何ともす可からざるに至るであらうから、外國の政策に對抗する手段を講ずべき點から云つても產業上の改革は缺く可からざることであるし、(二)又、工業を奬勵するの故を以て未開地の開拓が阻げられる樣な事實はあり得ないことであつて、由來人は土地の所有者たらんとする欲求の深いものであるが、米國の如くその機會の容易に獲らるゝに於いては、土地開發の如きは自らにして進捗すべく、而も農業の利益たる、徒らに耕地の廣大なるを以て多しとす可きに非ずして、耕作の精緻なるに依つて增進するものである以上、製造工業にしてよし植民地の開發を減少することありとするも、猶ほ且つ土地の收入を減少せざらしむることは敢て難しとはしないのである。

次に自由放任の主張よりして工業の奬勵を否定する論者があるが、一體人間の活動は慣習乃至は經驗に執着して新事業を興さんとするに兎角逡巡勝ちであるに加へて、其の成敗に對する懸念、同業者との競爭の脅威等に依つて著しく制肘せられるし、就中模倣し來らんとする外國工業が奬勵金乃至はプレミアムの擁護に依つて存在してゐる樣な場合もあるのであるから、政府の保護なくんば

結局工業は自滅する外はないのである。

更に合衆國に於ける勞働の不足、賃銀の高價、資本の缺乏が屢工業促進の反對理由とせられるが（一）移民の激增しつゝある現狀より推して勞働の不足の如きは絶對的の障害として憂ふるに足らず、而も既述の如く機械の使用に依つても能くその缺を補ふことが出來るのである。（二）賃銀の高きは一は勞働の不足より來る所であるから、その豐富なるに從つて下降するに至るが、他面またそれは利潤の大なる結果であつて、企業者は之を支拂つて別に損失を來すといふ譯ではないから、工業上さして不利益なことではない。況んや原料品の點に於いては、合衆國は歐洲諸國に比べて甚だ有利なる地位に在り、工業上の諸般の設備に對する費用も僅少で事足りる上に、外國商品には輸入上の萬端の費用の甚しく嵩んでゐることを考量して見れば、賃銀の高價に伴ふ多少の不利は優に償つて餘あるであらう。（三）資本の不足に就いては、果してその幾許に及ぶやを確實に究めることは容易ではないが、銀行の設置、外國資本の誘入、公債等に依つて之を補ふことは困難ではない。

又、工業を奬勵する結果は特殊の階級に利益を與へ、獨占を招いて物價の騰貴を來すに至ることを指摘してその不可なるを說く者もあるが、各工業が愈〻隆盛を致すに及べば內國工業間の競爭は必然的に代價を低落せしめ、結局合理的最小限度の利潤のみしか生ぜざるに至るから、一時的高價は必ずや永久的低落に依つて補償せらるゝことになるのである。

以上の考察に依つて更に三つのことが考へられる。（一）製造工業と農業とを併せ有する國の貿易は、農業のみに依つて立つ國の貿易よりも大なる利益があると同時に繁榮に向ふ。（二）啻に農產物のみならず、各種の工業品をも提供する複雜なる市場は、外國顧客の需要の範圍を大ならしめ、從つて商事企業の範圍をも擴張せしめる。（三）故にまた市場に於ける貨物の停滯を少からしめ、その迅速に販賣せらるゝ結果は更に國民の富と繁榮とに少からざる貢獻をなす。而して之等の事情を綜合して更に二個の重要なる推論を行ふことを得る。

第一、農業を基礎として製造工業が確立して居る國は、單なる農業國よりも遙かに有利なる貿易の平衡を得ることが出來る。

第二、その結果、前者に屬する國は後者に屬する國よりも多額の貨幣を所有することが出來る。而も製造工業の繁榮に依賴するものは、啻に一國の富ばかりに止まらず、その國の獨立と安全も亦その結果に外ならないのであつて、國家の政治は社會の安寧を保ち國防を全うすると同時に、衣食住のあらゆる必要物を自給するを得てはじめて一體の完全なるものたることを得るのである。

然らば今合衆國が依つて以つて工業を奬勵すべき手段は如何なるものを選ぶべきか。Hamilton は他國の用ひて成功を納めたる先例に倣ふべしとして、（一）保護關稅、（二）競爭を禁壓する爲の課稅、（三）原料品の輸出禁止、（四）奬勵金、（五）プレミアム、（六）原料品に對する免稅、（七）原料品に賦課せる稅金の拂戻、（八）新發明の奬勵及び輸入、（九）製造品に對する緻密なる制限、（十）送金上の便宜、（十一）運輸の便宜、等を劃策すべきことを、その各が齎す効果と共に說述して、此の報告書を終るのである。（六）

（一）Alexander Hamilton（一七五七―一八〇四）は三十二歲にして大藏卿の要職に就いたが、彼が此の報告書を起草するに

至つたのは、一七九〇年一月十五日の代議院の決議に依つて要求せられたるに依る。併し新に組織せられた聯邦政府の幾多の當面の問題を處理せねばならなかつたので、報告書が提出せられたのは一七九一年の十二月であつた。その原文は彼の各著作集には必ず納められてゐるし、State Papers on Finance. 並びに Congressional Documents の内にも含まれてゐるが、一般には手に入れることが困難である。私は Taussig, F. W.: State Papers and Speeches on the Tarrif. Cambridge. 1893. に復刻せられたものに依つたが、本書も既に絶版であつて、瀧本博士の藏書を借覽させて戴いた。

(二) Taussig: op. cit. p. 1.
(三) Op. cit. p. 4 ff.
(四) Op. cit. p. 12. ff.
(五) Op. cit. p. 25 ff.
(六) Op. cit. p. 62 ff.

五

經濟學説史上 List の地位を最も早く認めたといはれる Bruno Hildebrand は、(一)『List はその國民經濟上の研究に就いて、非常に著名なる先蹤者として、前世紀夙に Alexander Hamilton を有せしものである』。(二) と述べ、Ingram は『獨逸經濟論者 List が……故國亡命の砌合衆國に在住して Hamilton の著述に影響せられたりと信ずるの全然理由なきに非ざる』(三) を認め、Ramband は『思ふに彼の着想は亞米利加より、而して恐らくは Hamilton より來れるものであらう』(四) と稱し、Schmoller は『Friedrich List はその思想上 Hamilton の影響を受けてゐる』(五) と論じ、その他 List と Hamilton とを結び付けて考察しようとする學史家は甚だ多數に上る樣であるが、(六) 果して彼等が此の兩者の著作、殊に後者の報告書を詳細に檢討して如上の主張に到達せるものなるや否やは甚だ疑はしいのであつて、現に Hildebrand の如きも、その典據とせる所は Sartorius が Handbuch für Staatswissenschaft. 1796. の序文の内に記述せる甚だ簡單にして不完全なる紹介に依賴したるに過ぎず、その他の諸説にしても恐らくは之と五十歩百歩の差に止まつてゐると思はれるものゝ多いのは吾人の最も不滿に感ずる所である。此の間に在つて信賴するに足る考證に基いて兩者の交渉を立言せる者に M. E. Hirst があるが、(七) 猶ほ多少の承服し難い點を止めてゐるので、私は專ら List と Hamilton の所説の要點を思はれる部分に就いて、行論の上に如何なる類似が現れてゐるかを、兩者の原文を對照することに依つて摘出して見よう。

第一、自由貿易は現狀の下には不可能なり。

リスト

全世界が若し北亞米利加の二十四州の如くに結合されて一の聯盟を形成してゐるものとすれば、自由貿易は現に合衆國内に行はれつゝあると同樣に、全く自然に且つ有利に行はれるであらう（List: Outlines. reprinted in Hirst. p. 153）

ハミルトン

產業並びに商業に對する完全なる自由の制度が現に諸國民間に廣く行はれてゐるものとすれば、合衆國の如き窮境に在る國が製造工業の振興に熱中するを諫止するの主張は、疑もなく大なる勢力を有し得るであらう。（Hamilton: Report. reprinted in Taussig. P. 26.）

第二、單なる農業國は繁榮せず、工業は農產物に對する確實なる國内市場を提供す。

單なる農業國は、市場も貨物の供給も皆外一

單に農夫の業務が工匠の業務から分離する

國の法律若くは外國の好意惡意に依つて左右せられる。更に工業は學藝技術を養成して力と富との源となる。：　單なる農業國は常に貧困である。（p. 153）

：大きな動搖を阻止する樣な國民的組織に依つて農產物市場の確實を保つことであつて、之を保つには即ち製造工業を起して農產物に對する國內市場を拓かなければならない。（p. 258）

第三、新工業創設の困難及び之に對する保護政策の必要。

工業生產力は海運力と同樣に久しい努力の結果始めて獲得することが出來るのである。

或る事業に對して智識と經驗と技術とを要する事多ければ多い程益々、人は之に依つて生涯よく生活するを得べき十分の確信を有せざる限り、進んで之に從事しようと欲しない。凡て新事業は經驗と技術の缺乏の爲に永い間大なる損失を免れない。……之等の事情は新企業の開始を甚だ困難にする。……加ふるに舊國の國內市場が新興國に於けるよりも一層關稅の保護を加へられ、新興國內に於ける競爭が戾稅及びその市場に於ける課稅の缺如に依つて助勢せられる樣な場合には、新興國はそれが爲に彌が上にも舊國との競爭に堪えることが出來なくなる。（p. 223）

第四、保護政策は當初工業品の代價を騰貴せしむるも、競爭に依つて久しからず低落す。

是は國民の生產力を完成する爲に發生する費用なのであるから、この當初の失費は軈て數年の後には完全なる國民經濟から生ずる所の利益に依つて十倍にも二十倍にもなつて歸つて來るのである。（p. 197-8）

第五。國家の繁榮は農工商の併立に依存し、その爲に保護奬勵を行ふは政府の任務なり。

然しながら高度の力と富、完全なる獨立は製造工業にして農業及び商業と相調和せしめ

といふたけで、勞働の生產力を增進し同時に一國の生產物乃至收入の總額を增加するといふ結果が生ずる。（p. 13）

農夫の努力は、彼の勞働に依つて生產せらるゝ餘剩額の依賴すべき市場が、確實なるか動搖するか、若くはその適否如何に比例して、或は堅實となり或は動搖を來し、或は旺盛となり或は衰弱する、而して通例此の餘剩額は之と同じ割合を以て增減するといふことは明かである。

之を賣り捌く爲には外國市場よりも國內市場の方を遙かに優れりとする。即ちそが本來一層信賴するに足るを以てゝある。（p. 22）

習慣と模倣の精神との强烈なる影響、未經驗の企業に對する成功の懸念、新企業が、既に完全の域に到達せる同業との競爭に對して感ずる避く可からざる困難、諸外國が各自その國民の努力に對して與ふる奬勵金、プレミアム及び其の他の人工的奬勵。……一國の產業がたとひ等しい條件の下に於いて私利の導くが儘に任せて最も有利なる仕事に就くものであると信ずべき餘地が如何程あらうが、不均衡な條件に對してもよく之と拮抗し得、若くは自然に獲られたる利益、乃至積極的制限と人工的政策とに基く利益から生ずる偶然的障害をも悉く征服して、競爭に勝利を占め得ると信ずべき餘地はない。（p. 32）

從つて工業の發達を奬勵するのは窮極永遠に亙る經濟上の見地よりすれば社會の利益である。國家の見地を以てすれば代價の一時的騰貴は永久的低落に依つて十分に償却せられるのである。（p. 51）

啻に富のみに止まらず、一國の獨立と安全も、實際上製造工業の繁榮と密接な關係があ

られざる限り、決して之を獲得することは出來ない。(p. 167)

一國民はその國の產業が獨立し生產力が發達する程度に從つて、獨立の地位を得、勢力を伸張するに至るのである。(p. 189)

政府は苟くも國民の富と力とを增進するものであつて、個人に依つては此の目的が達せられない樣なものである以上は、當に之を促進すべき權利を有するに止まらずまた之を行ふをその義務とするのである。(p. 164.)

猶ほ兩者の類似せる論調は色々な點に限なくあるのであつて、一々それを對照して見ると成る程 List は如何にも Hamilton から保護論の理由を借用して來たものゝ樣に考へられるけれども、唯類似點だけを見て相違點を擧げぬ譯には行ない。尤も Hirst も Hamilton は保護關稅よりは寧ろ奬勵金を可とし、農業の保護をも行はんとするに反し、List は Nationale System の內に於いて明かに之と反對の意見を述べてゐる點までも摘出してゐるし、(八)或は又一方の論じてゐることで他方の全く觸れてゐない樣な點なども見出し得るのであるが、私は茲に於いても我々の問題に取つて餘り重要でないと思はれる諸點を一切おくことにする。では私の認めて以て List と Hamilton とを分つ重要なる相違點なりとなすものは幾許ありやといふに、私は只一點を擧げるだけで滿足するものであつて、而も之實に、Hirst 自身これを數へつゝも兩者の關係を肯定するに反し、私はこの一事あるの故を以て兩者の關係を否定せんとする所のものである。

Hirst に代辯させれば此の相違はこうである。『Hamilton は彼の議論を便宜の上に建設し、List は專ら夫を彼の國民性の理論の上に建設してゐる。』(九)と。女史の評言は適切で敢て言ひ變へる必要はないものゝ、猶ほ少しく附言して置く必要はあるであらう。

Hamilton の所論が便宜に基いてゐるといふのは、彼に確然たる學理上の根據の缺けてゐることを語るものであつて、斯くの如きは元來その報告書が純然たる一政治家の手に起草せられた政治的文書なる以上、寧ろ當然のことゝも考へられるのである。けれども Hamilton 必ずしも經濟學に對する局外者であつた譯ではなく、又彼の財政經濟上の論著が米國初期の經濟論の中に在つて、讀書と思索とに基いた最も秀れたるものであつて、亞米利加の經濟學史上些か見るべき業績は彼に至るまで殆どなかつたとさへ言はれてゐる位であるが、(十) 果して然らば彼の經濟學に對する研究に如何なる傾向が現はれ、彼の思想が如何なる學說に支配せられて居たかといふと、少く共報告書の關する限り、彼は正統學派を遠く出づるものではないと考へられるのである。Hamilton の研究に於ける權威 Dunbar が、彼が從前の經濟論者の影響を受けたることを認め、『殊に製造工業に關する報告書を考究して見ると、其の或る部分に於いては、項目の選擇の上にも、或ひは又その排列せられてゐる順序の上にさへも、Hamilton が Adam Smith を知つてゐた所から影響を受けてゐるといふ事が明かとなるであらう。佛蘭西經濟學者(Physiocrate)の諸著も恐らくは當時彼に依つて知られてゐる樣である。あらゆる國家はかゝる大目的に鑑みてその必要とする重要品を悉く國內に備へる樣努力せねばならぬ。そは即ち生活資料住居、衣類及び防衛である。

此れ等を所有することは一個の政體の完全を致す爲に必要であり、社會の安寧並びに幸福のために必要である。その何れかの缺陷は政治的生活と政治的行動とに對する重要機關の缺乏に等しい。(p. 55-6)

たらしい。』(十一) 云々と言つてゐる通り、彼が生產力の點に就いて農工を比較し、勞働の重要を論じてゐる箇所に斯くの如き證跡の顯然にることは、私が云ふまでもなく前節に於ける簡單なる紹介に依つて既に讀者の十分感得せられた所であらうと思ふ。斯くの如き正統學派流の見解と、米國の政狀に對する考慮とを相交へたる彼の保護奬勵の要求は、後の保護論者が把握して立てる、兵器を包藏せる一の武庫でこそあつたであらうが、彼の主張のみを以てしては能く List に經濟思想の體系を與へ、若くは H. C. Carey にその方法論を暗示することは出來なかつたであらう。寔に Dunbar も斷定せるが如く、『體系的經濟學は、彼の範例が常に財政史の研究者に對して與ふる刺戟を他にしては、何等の確然たる原理も、方法論上の何等の發見も、若くは實に何等の影響をさへも、彼に負ふものではないのである。』(十二)

然るに List は國民性の原理に基いてゐる。彼の經濟思想は實に Adam Smith の個人主義的、世界主義的經濟觀を排除して國民經濟にその根據を求め、物質主義に對抗するに力の重視を以てするのであつて、保護的主張は元より、そのあらゆる理論は皆悉くこの根本思想に貫かれてゐるのである。彼が此の國民性の主張を渡米前に有してゐたかどうかは茲に論じてゐる暇はないが、既に本論の始めに記した樣に、彼が亞米利加の國狀に依つて最も大なる敎訓を受けたことは疑ふべくもないことであつて、彼がその所信を先づ十二通の公開狀に披瀝しようとしたことも認められる。Hamilton がその報告書に示してゐる態度が、在來の學說の要點を巧妙に摘出し來つて、秩序整然、論を進むるに一分の間隙を遺さざるに引きかへ、List の公開狀又は往〻にして彼の大著 Nationale System まで、之に比して甚だしくその精緻を缺き、前後重複稍もするとその按配に一段の整頓を要するが如き思あらしむるは、彼が獨力以て新學理の創設に努力せる苦心の跡を止めてゐるに外ならない。

何れにしても Hirst が、List は渡米以前より既に彼の思想を確立してゐたことを主張する Eheberg の說を否定したゞけで、直ちに Hamilton 若くは M. Carey, Raymond 等の所論が彼に決定的な影響を及ぼしてゐると斷定してゐるが如きは、皮相なる早斷に止まるものであつて、List と Hamilton との間に、一般に信じられてゐる樣な深い交涉のなかつたことは、私が如上の理由に依つて自信を以て主張し得る所である。

從つて私が先に揭げた兩者の類似點が、兩者の關係を論ずる上に大なる意義を持ち得ないことは、少しく事の根底に立ち入つて考へを廻して見るならば容易に理解せらるべきであるが、その辯明は今茲に長々しく述べ立てる餘裕もなし、その必要もないであらう。唯かくの如き類似が當然發生すべき原因の存したことを一言して置く。凡そ保護奬勵の策に左袒し、而もそれが等しく米國の實狀を考察の對象として立論せられたものである以上、同樣なる觀察が兩者の間に顯はれても敢て不思議として詮議立てをするにほ及ばないといふ事が一つ。但しこの點でも Hamilton は List と異つて Mercantilism の傾向を多分に取り入れてゐることは、工業促進策に就いては之を外國の先例に學ぶべしとして擧げてゐる諸政策を顧ただけでも既に明かであるし、工業奬勵の利益を述べて最後に、貿易の平衡による正貨の流入に歸着してゐるのを見ても、又容易に推察することが出來よう。(十三)

次に更に重要なる理由として、當代社會の思潮を見逃してはならぬ Köhler は彼の工業報告書が

政治上の文書であつて、從つてその出版は寧ろ後年のことに屬し、List 自ら果して親しくその原文を通讀せるや否やに疑問を挾み、『併し Pennsylvania Society が List に仲介して此の報告書を一見せしめたといふことも、恐らく考へられるであらう。』(十四) と云つてゐるが、之は全く當て推量であつて、報告書が既に Philadelphia Society から出版せられてゐたことは既述の通りであるから、彼が之を讀んだか讀まぬかは別とした所で、之を手にすることだけは困難ではなかつたのである。又 Hirst が List は常に反對論者の名は悉く拉し來つて反駁の矢面に立たしめてゐるが、自說と同じ見地にある者の名は之を記してゐないと云つて Hamilton の名も彼の論著には遂に發見することが出來ない樣に云つてゐるが、(十五) 彼の公開狀の第三信の冒頭から數行を讀み下せば、保護論を唱へたるあらゆる時代に於ける最も開明せる人士の一人として、Washington, Jefferson と肩を並べて彼の氏名が記されてゐるのを發見するのである。惟ふに Hamilton の提唱せるが如き保護論策は、敢て彼一人に就いて敎を乞ふまでもなく、當時の保護運動に與せる人士の叫びとして、常に彼の親しく接してゐた所であるし、又彼が國內工業振興の要を說くに當つて Washington や Madison の所言に至るまで、之を引用して居る事實等もあるのであつて、(十七) 要するにその保護主義であるといふ點に於ては、之等の論者の所說も當代社會の輿論も、彼にとつて特にその一が重要であるといふ樣な印象を與へたものは無くして、結局これ等のすべてが一個の社會思想の潮流として彼に作用してゐたと解するも、決して謬想ではあるまいと考へる。

List と Hamilton との關係を否定する論者に Eheberg と Köhler とがある。前者は List の思想の根源は舊きにありとなすと同時に、彼の公開狀と Hamilton の報告書との間に相等しきものなきを主張してゐるが(十八) Harrower に從へば Eheberg も實は Hamilton の報告書を知らざるものであるといふ。(十九) 又後者に從へば List の特徵を Hamilton に見るの不可能なることを述べながら、而も猶ほ List が Hamilton の報告書を讀んだか讀まぬかといふ樣なことで去就に迷つてゐる。(二十) 兩者の論據は共に薄弱で吾人に十分の信賴を與ふるに足らない。從つて私は、以上に述べて來た私の所信を裏書きさせる爲に、斯くの如き論者の所信を借りて來ようとは思はないし、猶ほ言ひ盡さゞる點は多いが私の論證は夫を必要ともしまいと考へる。只最後に私は、List の思想に對して亞米利加の與へたるものは、"ungedrucktes Material, nicht gedrucktes." であつたといふ一語を Eheberg から借用して此の節を結ぶことにする。

(一) Spann, O: Die Haupttheorien der Volkswirtschaftslehre. 12-15 Aufl. Leipzig 1923. p. 110.

(二) Hildebrand, B: op. cit. p. 46.

(三) Ingram, J. K: A History of Political Economy. London. 1919. p. 161.

(四) Rambaud, J: Histoire des doctrines économiques. Paris. 1899. p. 245.

(五) Schmoller, G: op. cit. p. 700.

(六) Harrower, G. H: Alexander Hamilton als National-Ökonom, Halle, 1887. 猶は Cossa, Haney, Sherwood 等の學史參照、別に邦文のものとして、町田義一郎、米國經濟學の歷史的瞥見。三田學會雜誌第二十卷第九號百二十九頁。

(七) Hirst, M. E: op. cit. p. 115; p. 157 note (6); p. 170 n. (5); n. (7); n. (11); p. 202 n. (8); p. 210 n. (3); p. 227. n. (4).

（八）Hirst: op. cit. p. 116.

（九）Hirst: op. cit. p. 115-6.

（十）Dunbar, C. F: Economic Essays. New York. 1904 I. Economic Science in America, 1776-876 p. 7.

（十一）Dunbar: op. cit. p. 7-8.　Bourne: Hamilton and Adam Smith. Quarterly Journal of Economics. 1894.

（十二）Dunbar: op. cit. p. 8.

（十三）List も往々 Mercantilism に擬せられたが、適切なる評言とはいはれぬ。茲には詳論を省くが、その大要は Eheberg, K. Th: op. cit. p. 171 ff. に記されてゐる。

（十四）Köhler, K: op. cit. p. 105.

（十五）Hirst: op. cit. p. 117.

（十六）Hirst: p. 116.

（十七）三田學會雜誌第二十一卷第一號拙稿百二十二頁。

（十八）Eheberg: op. cit. p. 149.

（十九）Harrower: op. cit. p.

（二十）Köhler: op. cit. p. 105.

六

List と Hamilton との關係について私の述べた所は、また List と Raymond との交渉を對象としても等しく當て嵌まると思ふ。然しながら Raymond を以て List の先蹤者なりとする學史家の研究は Hamilton の場合とは異つて、非常に緻密であつて、先づ Neill が兩者の甚だしく類似せる筆致を漁つて對照し、正統學派の個人主義及び世界主義に對する國民主義の主張、個人の利益と社會の利益との一致に對する否定、各國民の併立に基く國民經濟の確立、交換價値に基づく Smith の物質主義に抗する生産力の提唱、等 List の根本思想と認むべき部分が皆 Raymond に依つて論述せられてゐる事を考證したのを始めとして、之を踏襲せる Lepelletier、之を根據として更に一層確實なる論據を獲得せんと努力せる Köhler 等の論證がある。(一)從つて之等の主張に應酬し、吾人の見解をも一層明徴ならしめんが爲に Raymond の大著の根底に存する體系的觀念をも併せて考究するに於いては、既に豫期に反して甚だ長きに亘つた本論を更に倍加するに至るやも計られず、加ふるに猶ほ此の點に關して十分なる研究を遂げ得ざりし事情もあつたので、此の第六節を形成すべき部分は後日再び筆硯を新にして詳論に及ばうと思ふ。(二)

（一）是等の學者の文獻は既に第二節の註(八)に記載した。

（二）斯くの如き次第で本篇に一箇の完全なる資格を欠くことが讀者にとつて迷惑なるべきは私の遺憾とする所である。本來ならば Hamilton の項の終りを以て折半し、Raymond に關する論證を了つた上で結論を附加すべきであるが、それにも係らず以下更に一節を附加すべき所以は、之と共に本論初頭の第一節を併せ考慮する場合に、始めて List の依る所を解することが出來、從つて又私の立場も些か明になりはしまいかと思ふのと、又一つには茲に省略する一節の主旨にして既に不完全ながら Hamilton の場合に說いた所を異らざる以上、行論の上にさしたる不都合もなからうと考へたるが故である。Raymond に關する一切と Hamilton に關して簡單に過した諸點とは悉く再稿の節補足するが、本論の中に陳開した私見に就いては、如何なる點でも嚴正なる批評を決して辭するものではない。

七

上來考察し來れる所に依つて、List の根本思想は或は M. Carey から、或は Hamilton から、乃

至は Raymond から、直接に藉りて來たものではないといふ事を主張し得るのであるが、猶ほかゝる私見に對して向けらるべきもう一つの駁論に答へねばならぬ。その駁論と云ふのは、學史家は或は Hamilton の影響を重視し、或は Raymond の影響を重視してゐるといふものゝ、必ずしも之等の一個のみを擧げて他を絶對に無關係なりとして顧みぬ譯ではない。然らば更に一歩を進めて、List は之等の人々の所論を併せ取り入れてその基礎を確立したと考へる方が至當であり、從つて之等先蹤の思想の一箇が裁然として List の内に存することを指摘し得ざるまでも、而も彼等と List との間に何等直接の關係を認めざるは不可なり、といふに在る。

然しながら、之に對する吾人の回答は容易である。一人の影響を否定し、二人乃至三人の影響を肯定する者に對しては、更に多くの複數を肯定せしめることが出來るからである。List が亞米利加に渡つて始めて手にした書籍が、之等三者の筆に成るものであつて、而もそれまでは彼が全然保護運動の潮流に接した事はなかつたといふことでも證明せられざる限り、彼の所論を數人の先驅者に歸せしむることは無理であり、事實彼が公開狀を執筆せる以前に Hamilton なり Raymond なりの著作を讀んでゐたかどうかといふことさへ確かでないのである。當代米國の工業地 Pennsylvania 州にその身を置き、保護政策の緊要を目前に看取すると同時に、喧囂を極めたる論爭を。積極的には保護主義の機關たる新聞雜誌パンフレト等に依り、消極的には Cooper の著書を始め自由主義を代表する各種の刊行物を通じて、親しく考察の衝に當れる List が、特に米國の實狀に即したる政策論として披瀝した The American System に世論の著しき反映の顯はれてゐることは寧ろ當然であるし、又その世論が M. Carey の指導に依つて動かされ、Hamilton や Raymond の主張がその背後に控えてゐたことも動かされぬ事實である。從つて之等の間に數多類似の點を發見することが出來るのも決して怪しむに足らないのであつて、私は List と Hamilton 或は List と Raymond の關係を云々する學者等は寧ろ先づ Hamilton と Raymond との比較でも試みるべきではあるまいかと思ふのである。然しながら List の經濟論の根底には猶ほ彼に特有のものが保たれてゐるのであつて、それが外部から忽ちの間に附加せられたとのみ考へることは許されない。私は本論に於いて此の List 獨自の立場が何時確立したかといふ問題に對する私見を全然差控えたが、その亞米利加に於いて著想せられたりとなすに於いては勿論、たとひ又之を渡米以前の所產なりと見るにしても、在米中彼の實見せる社會狀態と社會思想とが、換言すれば彼の境遇が、時代の趨向が、彼の經濟思想の形成に對して最も有力なる刺戟を與へたることは否定出來ないであらう。

私はこれまで List の經濟思想といふ場合に專ら彼の公開狀に顯はれてゐる所論のみを指してゐたが、公開狀以外の主張にも米國實社會の暗示を受けたものが少くないのであつて、例へば鐵道政策の如きは何人も之を容易に承認する事が出來よう。(一)併し私が茲に一言して置く必要のあるのは List の名と共に必ず聯想せられる所謂經濟發達階段說が、專ら彼の米國に於ける觀察の結果に由來せることである。(二)彼の階段說は亞米利加時代の著述には未だ現はれてゐないし、彼の大著より先立つて何等かの述作の中に述べられたものであるかどうかも、未だ私の詳にする能はざる所であるけれども、最近の考證に從つて大體、一八三七年十二月三十一日附を以て彼が Académie des sciences

morales et politiques. に呈出せる論文 Lorsqu' une nation se propose d'établir la liberté du commerce, etc. の内に記してゐるのが最初とすべきものではなからうかと推定せられる。(三)その記述は數章に分たれ詳密なものであるが、一方 Nationale System の中に於いては序論の中の僅々數頁に簡單に記されてゐるに過ぎない。(四)之等の事情を考察するならば、List が『此の說を立てたるは特に經濟發展の階段そのものを論究せんがために非ずして、その商業政策を講究し、時代に應じて適當なる策を立てざる可らざることを說かんが爲に外ならず。』(五)となす在來の學說は、National System に就いては言ひ得られるとするも、階段說の成立過程より見れば寧ろ反對で、彼が各國各時代の商業政策の相異すべき所以を討究しつゝある間に、歐米の實狀を比較對象して漸次に發達の趨勢を把握するに至つたと解すべきであつて、List が經濟發達の過程は米國に於いて始めて明瞭に知得するを得たりと稱するは、(六)『最も重要なる經濟上の發達が猶ほ未だ記憶に新なる時代に行はれし國に於いては、此の大いなる發達を支配せる社會進化の法則に關して、何等かの重要なる發見を成し就げ得たであらうと想像するも亦故なきに非ざるべし。』(七)と言へる Leslie の所說に顧みても、あながち之を List の自家辯なりとして信をおくに價せずと斷定することは出來ないのである。(八)

寔に舊大陸を放たれたる List が其の身を新大陸に託せる五ヶ年の歲月は、彼の思想に對して著しい影響を及ぼしたのであつた。吾人が Häusser や Ehberg に從つて彼の獨創的天賦を認めるにしても、或は又 List 自身の所言に從つて其の說の由來する所遠きにあるを容るゝにしても、若し彼にして終生歐羅巴に止まり、當代獨逸の實狀と何等相通ずる所なき體系に基いて政治學の革新に沒頭せる Kraus の學徒を措いて他に知見を擴むるのよすがなかりせば、恐らく彼は舊學說に對する疑問をも悉く氷解すること能はず、新學說に對する抱負をも盡く展開することを得ずして了つたかも知れない。漂客 List を迎へたる合衆國は當時建國の日猶ほ淺きにあつて、茲に特有の自然的、社會的、政治的狀態と、富と文明と國力との驚くべき增進とに依つて、實證的歸納的研究に對する大なる視野を提供したのであるが、此の新興國民の總てが實生活の要求に追はれて學問上に未だ考慮を費すの暇なかりし時、よくその任に當るを得たる者に達識と慧眼と兩つながら具有せる一獨人のありし事は、又理由のないことではなからう。

以上私は List の思想に對する米國社會狀態の影響を强調して來たが、最後に誤解を避けるために一言せねばならぬことは、私の見解は List の根本思想を以て全然米國に於ける環境の所產に歸せしめんとするものではないといふ點である。國家學辭典の內に Ehberg は『亞米利加に於いて始めて彼は事實關係と相結んで Adam Smith の傾向に反對するに至つた』(九)由を述べてはゐるが、只單に米國の環境に身を投じたるのみで忽然として彼の思想が極端より極端へ容易に變轉するに至つたと考へて間違ひないか。若し List にして米國に入るまで正統學派の主張に固執して居つたとすれば、米國に於いても保護論に比して寧ろ大いに優勢を誇りつゝありし自由主義の陣營に投じて、Cooper 等を相共にその論陣を固めざりしは如何。惟ふに List の根底は合衆國に渡つて始めて一朝の間に形成せられたるものには非ずして、その萠牙は遠く之を渡米以前に求むべきである。議論の複雜に亘るを避けて彼の所說の淵源に關しては本論に於ては全然之を不問に附したが、此の點を明

かにして List の研究を全からしめんが爲には、彼の生涯の經歷とその背景をなす當代獨逸の經濟史とは元より、やがては獨逸に輸入せられたる正統派經濟學の變遷より、獨逸に興起せる浪漫主義の潮流にまでも遡らねばならないのである。

（一）本誌一月號拙稿一二五―六頁參照

（二）經濟發達段階說を List 以前の經濟學說に發見せんとする試みは完全な定說と認む可きものはないが二三ある。先頃藤林敎授の示敎に依り Helander, S: Die Ausgangspunkte d. Wirtschaftswissenschaft. 1923. を借覽してその Exkurs. に Adam Smith に同樣の記述あることが稍詳かに對照せられてゐるのを知り、更に Wealth of Nations. 及び Smith's Lectures. （本書は伊藤敎授所藏本借用）を一覽したが、Smith と List との關係を直ちに肯定するを得るかどうかは今猶ほ私の疑問とする所であつて、寧ろ Smith の先蹤を發見する方が容易ではないかと思はれる。猶ほ Smith の段階說に關しては Plenge, J: Die Stammformen der vergleichenden Wirtschaftstheorie. 1919. にも紹介せられてゐるが、嘗て Hildebrand に依づて Varro に求められたる段階說の先蹤は（Hildebrand, B: Natral-, Geld, und Kreditwirtschaft, 1864.）Plenge に依つて遂に諸學の祖 Aristoteles に歸せしめられてゐる。又 Harms, B: Volkswirtschaft und Weltwirtschaft. 1912. に從へば Storch, H: Cours d'économie Politique. 1815 の內に之が述べられて居るといふし、未だ發表はせられないが增井敎授の高敎に依れば Dunoyer の思想は經濟發達の階程に依つて一貫せられてゐるので或は List と何等かの關係はないかと考へることが出來る。

（三）Sommer, A: Mitteilung über ein bisher unbekanntes Werk Friedrich Lists. Schmollers Jahrbuch. 50 Jahrg. 5 heft. 1926. 猶ほ List の論文の原文は未だ手に入らないからその詳細は茲に言へないけれども Dunoyer と比較する時 List の此の佛文論文は非常に興味がある。Dunoyer の主著 De la liberté du travail, etc. は一八四五年の出版であるが、その初版乃至第二版とも云ふべき L'industrie et la morale considérées dans leurs reports avec la liberté. 1825. か Nouveaux Traité d'économie Sociale. 1830 かに既に同樣な主旨が述べられてゐるならば、List が階段說を始めて佛蘭西で詳述した事實と併せ考へても、Smith と List を比較する以上に有力なる所說となるであらう。此等の點は讀者と共に增井敎授の詳細なる研究の完成を期待したい。

（四）List: Nat. System. op. cit. p. 63. ff.

（五）本庄榮次郎、經濟史研究大正九年再版第一編經濟發達階段說。五頁

（六）上記六六頁。

（七）Leslie, T. E. C: Essays in Political Economy. 2 ed. 1888. XIII. Political Economy in the United States. p. 127.

（八）本庄、上揭書（六―七頁）には List は『寧ろ英國を目標とせること稍々明かなりといふべし。』と記されてゐるが同氏の解釋は少しく承服することの出來ない點もある。何れにしても階段說に關する記述は茲には甚だ簡單で十分私見を陳べることが出來なかつたが、斯說の學史的考察と共に姑く他の機會を待つことにする。

（九）Conrad. u. a: Handwörterbuch der Staatswissenschaften. Bd. VI. Art. List.